

# よこのやま新聞



## 多面的機能支払交付金の活用

11月20日から22日の3日間、新潟市内で農村振興リーダー研修という勉強会に参加。今後中山間地域をどのように維持してゆくか。同じ課題を抱えた新潟県内の市町村、多面的機能支払

交付金の組織団体が集まった。事例地区の報告発表会や今後どのように地域資源を生かしてゆきたいかを発表するワークショップなど、内容盛りだくさん。3日間



と長丁場ではあったが、有意義なものとなった。

多面的機能、といわれると正直意味が分かりにくい。要は農村での集落、田畑の維持活動を組織共同で行い、それによって中山間地域を維持しましょう、そのための金銭的な援助を国が出しますよというものだ。ただ、研修にでて他組織の話聴いてみると本来のこの制度が持つ性能をフルに使っているとところはほとんどない。十日町市内も恐らく同様だと思われる。市町村などからの指針もなく、要は組織内でのアイデア次第でこの制度は大きく有用性が変わるものなのだ。私自身も不明のところは多くあったが、上手に使っている組織の話伺えたのは収穫であった。

## 組織の広域化

多面的機能支払交付金の組織を一本化し広域化するという動きは全国で広まりつつあるようだ。新潟県内では見附市、糸魚川市がその先駆者。どちらも30集落以上の参加がある。研修会に来ておられたので伺ったところ、事務は一本化し、入った交付金は集落単位の耕地面積によって配分しているそう。しかし全国にはもっと上手がいる。それが島根県出雲市旧窪田村地区の事例だ。

## 獣被害を食い止める

多面的機能支払交付金制度を鳥獣被害対策へ有効活用している組織もあった。新潟県新発田市上三光集落の取り組みだ。集落の環境は中山間地にある悩みと同じで山林資源の放置、兼業化による耕作放棄地の増加、人手不足。これらが複合的に合わさる事によって『山がどんどん下りてくる』のだ。それにより鳥獣被害が年々増加しているわけであるが、対策には数多くの問題点がある。そのひとつが地

域毎の温度差だ。被害の程度が個々で違う事、住民によって獣そのものへの意識が違う事、鳥獣被害に対する知識が乏しい事、などが挙げられる。また、鳥獣被害を地域全体の問題として捉えることも難題であったそう。大切なことは未然に防ぐ、つまり安全保障としての考え方を共通認識として持つということであろう。松之山は雪によって獣の被害がある程度食い止められている面もある。しかしそれでも被害はゼロではない。限りなく被害をゼロに近づける努力は必要になって来るのではないだろう

29の集落が7つの自治振興会に分かれていた。またまとめるのに相当な時間がかかったそうだが、現在ではその7つの自治振興会、JA、小学校そして2つの農業法人合わせて484世帯が参加している。何よりすごいと感じたのは、事務だけでなく受け取る交付金を一本化している点だ。これによって大きなお金が入り、各自治振興会が集落から集約したニーズを老朽度、利用度、危険度、実施可能性などの観点から重点度を点数化、これによって重点度の高いものから順番に一気にまとまった大きなお金を投下している。また、実際の作業も集落単位で完結させるだけでなく、農道のコンクリート舗装、排水パイプの設置、開水路の目地詰めなど各集落の各分野に精通した人材を中心に組織を編成し、地区全体での活動に落とし込んでいる。それによって人手不足も解消されたということだ。

集落単位では作業面、技術面で人材確保が困難であるが、広域化を図ることによって解決された好例といえるだろう。上三光集落は共通認識を持つという事で、鳥獣害マップ、というものを作成したそう。集落住民で危険箇所を歩き、ふせんで白地図にマークしてゆく。そして生き物と人との緩衝帯を作るために山林伐採を行った。そのための資金を多面的機能支払交付金で賄っている。また自己管理できない農地を集落共同管理にし、共同で草刈りを行うなどの取り組みも実施している。こうした様々な取り組みが、個々の農家の意識を徐々に変えていったのであろう。